



タイトル 東大教授

著者 沖大幹 (おき たいかん)

出版社 新潮社

発売日 2014年3月20日

ページ数 206 ページ

著者は、東京大学生産技術研究所教授で、専門は水文学^{すいもんがく}である。著者が本書を執筆した理由を三つあげている。

一つ目は、東大でいかに学問に取り組むのかに関する様々な智恵や心構えを後進に書き記して伝えたい。どのようにして、東大で教育研究業務に取り組むべきかに関しては、誰も体系的に教えてはくれなかった。そこで、著者自身の経験談でも書き残しておけば、次の世代は同じ試行錯誤を繰り返す必要が無くなり、さらにその先に進めるのではないかと期待し、本書を構想した。

二つ目は、優秀な若者が東大教授を目指さないのは長期的に悪影響が大きいという危機感からだ。「東大で出来ることは大体やり終えた。これ以上東大にいる必要性は感じられないので大学院はアメリカに行く」という学生達に、東大だってそんなに捨てたものじゃないよ、東大教授になる人生も悪くないよ、と優秀な若者にアピールしたかった。

三つ目は、東大教授への信頼感の喪失に対する危機感。東大教授は身分が保障された自由人であり、目先の利害や権力動向に左右される必要がなく、しかも話を聞いてくれる人が沢山いる、という恵まれた立場にいる。著者は、そういう立場を社会のために活用する若い仲間がどんどん増えればいいな、と願っている。

「教授本」としては、「工学部平野教授」(今野浩)、「文学部唯野教授」(筒井康隆)、「白い巨塔」(山崎豊子)などがあるが、本書は現役の東大教授自らが「東京大学教授という職業は素晴らしい。読者諸君も目指したらどうか」と誘ってくれる。

東大生ほどには知られていない東大教授。その特徴、どうすればなれるのか、そもそもなろうと思えばなれるのか、普段はどんな仕事をしているのか、社会的な役割はどうなっているのか、さらには、もし東大教授になれたのなら、何をどうしなければならぬのか、

どうやって教育研究活動を推進し組織を運営していけばいいのか、・・・・・・・・。

さて、目次を見てみよう。

まえがき

第1章 東京大学教授解体新書

—— 東京大学と東大教授そのものについての概略

第2章 どうすればなれるのか

—— どうすれば東大教授になれそうか

第3章 社会的役割と権威

—— 専門家としての東大教授

第4章 醍醐味と作法

—— 教育者としての東大教授

第5章 知的生産現場のマネジメント

—— 教育研究事業の経営者としての東大教授

第6章 おわりに

あとがき

まえがきに、「本書は、知的生産に携わる多くの方々、広く大学業務や様々な形で東大教授と関わるの方々、そして、東大教授を目指してもいいかな、と思う若い方々に刺激を感じて頂けそうな内容を盛り込むように精一杯心がけた。

東大教授になったらどんな風に教育や研究をしようか、国会に呼ばれたりテレビに出たりする際にはどうしよう、などと想像しつつ楽しんで読んでもらいたい」・・・・・・・・。

とは言うものの、本書を読んで「よし、東大教授を目指そう」という人はほとんどいないであろうから、一般の読者は、本書の「教育とは何か」、「研究とは何か」、「生きがいは何か」辺りを中心に読むことをお薦めする。

昨今の日本の学者は、情報を生産せず情報のブローカーばかりやっている感があるが、以下では、本書に出て来る著者の「きらりと光り、心に響く言葉」を挙げておこう。

・僕たちの体が物質的には普段食べているもので出来ているように、僕たちの知性は普段接している人や媒体から得られる情報、知識によって形作られている。知的な刺激に満ちた環境に身を置き、昨日より今日の方が少し知的になれたかな、と毎日僅かながらでも感

じられる日々の暮らしは誇らしく感じられる。

・「明日死ぬと思って生きよ。不老不死だと思って学べ」。これはマハトマ・ガンジーの言葉である。前半は、一日一日を充実させろ、今を大事に暮らせ、という教えである。もし明日死んでしまうのだとしたら、勉強しても何の役にもたたない、と思い僕たちは遊び呆けてしまう。それを諫めているのが、後半である。勉強するのは何かに役立てるためではなく、学び続ける過程こそが人生だとガンジーは僕たちに諭している。

・大学を卒業したら習得した専門とは関係が薄い職種に就職する学生が増える中で、研究を通じた教育は、逆にその意義を増している。なぜなら、研究の過程では、

① 取り組むに足りる学術的（かつ社会的）意義があり、利用可能な機器や時間など研究資源に制約がある中で達成できそうな課題を設定し、

② 未経験の問題を解決するために

* 新たな知識や手法をいかにして会得するのか

* 必要な情報にどうやってアクセスするのか

* 新しいアイデアをどうやって生み出すのか

* 独自の視点をどうやって持てるのか

あるいは

* ボスの理不尽な要求にどう対処すれば良いのか

③ そして、研究に取り組む最中に

* 自分自身をどうコントロール、管理するのか

* もし失敗したら、どう後始末すればよいのか

などを学び、体得できるからだ。いずれも社会に出れば、どんな知的職業についても必要とされる技能であり、研究対象に関する知識、すなわち「何を研究したのか」ではなく、研究した経験、すなわち「どう研究したか」が必ずや役に立つ。

・研究に取り組む際には、プロの研究者よりむしろ学生の方が有利な点もある。一般に、新たな視点を持ち込んでくれる「若者」、「ばか者」、「よそ者」が組織には大事だというが、学術研究にもそのまま当てはまる。

研究コミュニティを知らないよそ者である若者が、専門知識に欠けるばか者として基本を学ぶ際にその分野の根本的な常識に疑問を投げかけてくれるおかげで、新たな視点から理解が深まったり、理論や学術体系の不十分な点が見出され、それが糸口となって抜本的な学術の革新が生じたりする。

・未経験でも、あたかも経験したかのように感じ取れる能力が教養だ。あるいは、いちいち経験しなくても判るようにするのが教育であり、そうして身につくのが教養である。

・普通の人と違うことを恐れている「出過ぎた杭」にはなれない。東大は封建的で不自由な雰囲気だと思われているかも知れないが、「出る杭は打たれる」ことはあっても、「出過ぎた杭は打たれない」、非常に出過ぎた杭は倒れないように周囲が支えてくれる。



かつては「出る杭は打たれる」と言われたが、最近では「出ぬ杭は腐る」といわれ、さらにごく最近では「出る杭は育てよう」に変わっている。

・竜巻の強さを表すFスケールにその名を残すシカゴ大学名誉教授の故藤田哲也先生は、小学生の頃、「青の洞門」の話を聞いた時、20年かけて穴を掘った人は本当に立派な人だと思ったが、自分だったらそんな努力はしないで、まず最初の10年で穴を掘る機械を発明し、その後2倍のスピードで穴を掘る方が有効だと思った。つまり、後に「穴」と「機械」が残るからだ。研究でも同じで、仕事を始める前に「道具」を作る。そうすれば研究結果と道具の二つが残る。

ひたすら努力を重ねることでやがては報われるかもしれないが、やみくもに時間を費やす前に、落ち着いて作戦を練る方が賢いというわけだ。

・根拠のない自信もあった方が良い。大人になると、素直に褒めてくれるのは家族と恋人くらいのもので、そうでないのに褒めてくれる人は何か変に利用しようとしているのではないかと用心した方が良い。何時成果が出るとも知れぬ研究に取り組んだり、これまで誰一人対処できていない課題でも自分なら解決できると挑戦し続けたりするには、「根拠のない自信」がないと無理だ。もちろん、自信を裏付ける実力がなければ、自信だけあっても悲劇、あるいは喜劇だ。要は山あり谷ありの波乱に満ちた研究人生で心が折れてしまわない強靭さ、自分で自分を褒められる能天気さが必要だ。

・たとえ偽善者、厚顔無恥と陰口を叩かれようと、自分のことは棚に上げてでも人の道を説くのが教師の役割だ。そうでないと人類の進歩はない。そして同様に、自分の研究成果はさておき、研究の道を説くのが教授の役目だ。大学生になると人を見る目も肥えてくるから、実績がないとなかなか相手にして聞いてくれないが、真に優秀な学生は愚かな教師からも学ぶべき点を見つけてくれる。

などなど。。。。。

著者は、本書で紹介されている大学教授の職務や教育研究活動に関する内容にかなりの部分は、日本中の大学一般に当てはまるのではないかという言葉を残して本書を閉じている。

2014. 9. 3